

平成30年6月12日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12932

研究課題名(和文)近代ピアノのマテリアルヒストリー

研究課題名(英文)A Material History of the Modern Piano

研究代表者

永原 陽子(Nagahara, Yoko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90172551

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：近代ピアノの成立は通常、鉄フレームの導入によって特徴づけられるが、単純に産業革命の単純な産物ではなかった。象牙加工の機械化に伴い鍵盤製造業が成立し、それがピアノアクション製造業を成立させたこと、そしてその他の部品生産業と多数の中小の手工業的ピアノ製造業が並立する状況が続いたのち、ごく少数の大生産者が出現する20世紀の体制に移行した。その過程は、アフリカとの直接的な結びつきによる象牙供給を梃子にして展開した。一方、最終製造物としての近代ピアノのアフリカにおける普及や利用の状況は、南アフリカの例が示すように、植民地状況や人種関係を反映しつつも、単なる植民者の文化の輸入にはとどまらなかった。

研究成果の概要(英文)：The modern piano, which usually is characterized by the introduction of the cast-iron frame, was not the immediate product of the industrial revolution. The industrialization of ivory processing, such as for combs and billiard balls, brought about the new keyboard industry, which again gave rise to the industrial division specialized in piano actions. Numerous small scale piano makers, sustained by the piano parts industry producing actions, soundboards and others, had existed before the production of the modern piano was finally monopolized by a handful of big makers. The process was realized based on the supply of ivory directly exploited from Africa. The distribution and the use in Africa of the modern piano as an end product was not just an introduction of the culture of the colonizers, though they reflected the colonial situation as well as race relations as was shown in the case of South Africa.

研究分野：世界史

キーワード：ピアノ マテリアルヒストリー アフリカ 象牙

## 1. 研究開始当初の背景

南部アフリカを中心とする帝国主義史・植民地史およびアフリカ地域史の研究に携わる研究代表者は南部アフリカでの現地調査・史料調査を重ねる中で、この地域での象牙捕獲活動が1850年代から急速に拡大する事実気づいた。象牙の獲得が18世紀以降のヨーロッパ諸国のアフリカ進出の動機の一つであり奴隷労働とも深く結びついていたことはつとに知られている。しかし、大陸全体での産出の急拡大の時期や地域ごとの変動とその理由については論じられてこなかった。このことは、研究代表者の別の関心領域であるピアノ音楽の歴史と交差して、植民地研究の新たな切り口を発想させるものとなった。1850年代とは近代ピアノが工場制によって生産され始める時期に当たり、ヨーロッパにおける象牙需要がピアノ鍵盤の生産と相関関係をもつと推定されたためである。

一方、研究代表者は、南アフリカでの史料調査の過程で、欧米における近代ピアノ産業の草創期に、同地にすでにピアノが輸入されていた事実にも遭遇していた。ここから、近代ピアノの成立と普及、生産から消費に至る全過程を、アフリカを中心とする非西欧地域を含む世界史の中でとらえる事例研究を通じて、一つの「もの」を手掛かりに社会経済史と社会史とを統合した植民地研究を進めることを構想した。

19世紀半ば以降の近代ピアノの成立・発展史は、従来、音楽史の一ジャンルである楽器史研究において扱われてきたが、そこでは最終製品としてのピアノの存在が前提とされ、材料の調達を含む生産過程は対象外とされ、またその消費にかんしても主たる関心を欧米地域においてき

た。この楽器の生成から普及までの全過程を同時代の世界の諸地域間のつながりの中でとらえることは、マテリアルヒストリーという植民地研究の新たな方法を切り拓くものになると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、近代ピアノという一つの「もの」を取り上げ、その成立期である19世紀初めから20世紀半ばまでの間を対象に、その生産(材料の調達、製造)から消費(輸出を含む販売、普及、利用)までの過程を、アフリカを中心とする植民地地域と欧米地域との関係に結び付けて明らかにすることを目的とする。具体的には、第一に、19世紀半ばに始まる近代ピアノの製造について、材料面に着目し、それが同時代の世界のいかなる社会経済的な結びつきの中で成立したのかを、「もの」の流れから明らかにする。第二に、完成した製品としての近代ピアノがいかなる経路・事情により非ヨーロッパ地域に普及しいかなる社会史的意味をもったのかについて事例研究を行う。

## 3. 研究の方法

本研究は上述の二つの問題群について、それぞれ以下のような方法で取り組む。

第一に、近代ピアノの製造をめぐるものの動きについて、近代ピアノ成立前期から成立後までの使用材料の変遷を、文献資料ならびに実物資料の調査から把握する(ドイツおよびイギリスでの博物館およびピアノ製造会社資料館での調査) 各地の貿易統計の分析から原材料の動きを跡付ける(公開資料および英国立文書館・大英図書館所蔵史料の調査)

ヨーロッパおよびアメリカのピアノ製造会社およびそこに材料・部品を提供する会社の企業史の検討から、利用される材料の動きを分析する(文献調査およびピアノ製造会社資料館の調査) ~ を総合して、近代ピアノ成立期から20世紀半ばまでの近代ピアノ製造過程と植民地地域との関係を把握する。

第二に、近代ピアノの導入と普及の様相について、南アフリカの場合を事例に、植民地期および連邦期の貿易統計の検討をつづいてピアノの輸入の実態を把握する、ケープタウン市の入札資料の検討を通じて公的機関によるピアノの導入の実態を把握する（南アフリカ国立文書館ケープ分館およびプレトリア分館）、ケープタウンでのピアノ販売関係者・技術者からの聞き取り調査により販売先の実態について把握する、両地域での学校ならびに軍隊関連予算の検討からピアノ普及の状況について把握する（南アフリカ国立文書館ケープ分館およびプレトリア分館）、タウンシップでのピアノの普及にかんし現地調査を行う、～を通じて、近代ピアノ成立期から第二次世界大戦後までの南アフリカでの近代ピアノ普及の様相とその利用の状況についての概観を得る。

#### 4. 研究成果

##### I. 近代ピアノの製造局面について

近代ピアノをそれ以前の鍵盤楽器と区別する最も重要な点が鋳鉄フレームの導入であり、まさにそれこそがピアノが近代工業製品たることの核心的な意味であった点は一般に指摘されている。それに対し、本研究は近代ピアノの根本的な特質からすれば「本質的」なものでないように見える材料材料（象牙、黒檀、マホガニーなど）に着目した。たとえば、鍵盤の表面を覆う象牙はピアノの音には何ら影響しないが、膨大な種類の部品から成る構成物としての近代ピアノは、多様な「もの」の集積に支えられ、複雑な過程を経て今日われわれが知るようなごく限られたピアノ産業の生産する製品として普及するようになった。本研究は、そのような過程を植民地産品の動きに着目して分析し、以下の点を明らかにした。(1)近代ピアノの音にかかわる主要な部分は、鋳鉄フレームをはじめとして近代工業製品によって作られており、それらの中に、

ピアノ独自の目的で開発された技術をもつものはない。一方、象牙（鍵盤表面）、黒檀（鍵盤）は、近代ピアノ以前の鍵盤楽器の段階から、他の材料（たとえば鹿角）と並んで使われていたが、近代ピアノの成立期（19世紀前半）を通じて、とくに1840年代から50年代の間にその使用が定着することが実物資料の検討から確認された。

(2)(3)以下で述べるとおり、近代ピアノ生産のいわば「ハブ」の機能をもつことになる鍵盤用象牙加工は、19世紀に入り、ザンジバルからの象牙利用により急拡大する（英議会資料所収、英領アフリカ各植民地からの輸出統計、Diplomatic and Consulate Report 各年の分析）。ザンジバルからの象牙輸出規模の拡大は、本研究の当初の仮説のように近代ピアノ用鍵盤の作成を直接の契機とするのではなく、装飾品、櫛、ビリヤードボール等、それまでにあったものが工場制により大量生産されるようになったことに起因していた。

(3) 19世紀ザンジバルからの象牙輸出先の過半を占めたのはアメリカ合衆国コネティカット河口地域で、この地域で従来行われていた櫛生産が機械化されるのと同時に、ピアノ用鍵盤生産が始まり、1860年代までに専ら Comstock Cheney 社（その拠点は Ivoryton と名付けられる）と Pratt Read 社とによって担われるようになった（後者は1936年に前者を吸収合併）。象牙加工から出発しその工場生産化を進めた両社は、鍵盤の表面を覆うものとしての象牙加工から、鍵盤と連続するアクションを製作することへと事業を拡大していった。とくに注目されるのは、1870年代に Read 社が、ピアノメーカー Chickering 社および Steinway 社にアクションを納入する契約を結んだことである。この関係は、両者が合併により新 Pratt Read 社ができて以降も続く。Chickering と、とりわけ Steinway

という、アメリカにおける最大のピアノメーカーであり、ドイツおよびイギリスでのピアノ製造にも多大な影響を与えた両者の製品においては、鉄骨フレームや響板という土台部分以外にピアノの基幹的部分であるアクションの専門的生産が、象牙加工という「非本質的」部門から発展して生まれたのである。

(4) 鍵盤およびアクションの専門的製造者の成立の意味は、広く同時代の欧米のピアノ製造をめぐる状況から検討することによりいっそう明確になる。20世紀初めの段階で、アメリカでは300社以上のピアノメーカーがあった。その創業時期は1870年代から1900年ごろに集中している。一方、これらのピアノメーカーに部品を供給する会社は90社ほどあり、それぞれ鍵盤、アクションのほか鉄骨フレーム、弦、ハンマーおよびハンマー用フェルト、響板等を製造していた(Alfred Dolge, *Pianos and Their Makers*, Covina, 1911. 以下、他の国々に関するデータの出典も同様)。周知のように、これら多数のピアノメーカーおよび部品製造会社は20世紀半ばまでに淘汰され、今日われわれが名を知るような主要ピアノメーカーに統合されていくが、そのような近代工場制による大量生産は、産業革命期の鋳鉄フレーム導入以降の直接の発展の結果ではなく、象牙加工からアクション製造への転換に見られるように、植民地産品(多くの場合「奢侈品」とカテゴライズされるもの)の利用を梃子として、家内制工場と大差ない規模の小生産の過程をいったん経由してから大企業による大量生産体制へと展開したことがわかる。

(5) 上述のアメリカでの経緯は、世界規模での近代ピアノ製造への道程を示しているが、ドイツの場合にも、コネティカットのIvorytonのような特殊産業都市の成立こそないものの、象牙輸入・加工と鍵盤製造

とは密接に関係していた。ハンブルクのHeinrich Adolph Meyer社は1850年代半ばにザンジバルで、つづいて60年代には大陸部東アフリカの内陸での象牙捕獲を組織し、その輸入販売の中心となった。また植民地期には同じくハンブルクの商社O'Swald社が象牙取引に参入する。これらの会社が、ハンブルクのWeidner社のような比較的短命の鍵盤製造者からHermann Klugeのようにその後今日に至るまでSteinway社(アメリカの同社から分かれたハンブルクの会社)に鍵盤を供給することになった(現在ではKlugeはSteinway傘下)。20世紀初頭に300弱のピアノメーカーと約90の部品製造業者を擁したドイツでも、ピアノメーカーの巨大化(大企業による小企業の吸収)は、象牙加工と結びついた特定鍵盤製造業による専属的鍵盤供給に媒介されたといえる。

イギリス(イングランド)の場合には20世紀初頭にピアノメーカー170社、部品製造会社20社ほどが存在し、部品製造者の約三分の一が鍵盤およびアクションに特化していた。それらが全体として象牙鍵盤部門を世界的に牽引していたことは、1820年代の段階でフランスを代表するピアノメーカーPleyelがイギリスのピアノ製造から最も学んだ点が象牙鍵盤であったとの事実(Michale Kassler, *The Music Trade in Georgian England*, London, 2011)からも窺える。オーストリア=ハンガリーの場合には、同時期にピアノメーカーが130強あり、人口に比して数が多いが、部品メーカー10あまりである。すなわち、全行程をピアノ製造者が行う「前近代的」な生産方式が20世紀初頭にも続いていたことが知られる。しかし、それらの製品は装飾性が高く、象牙やマホガニー等が多く使われる場合が多く、そのことが逆に植民地地域からの産品との結びつきを強めている面がある

ことも見過ごせない。

(6) 以上を総合してみると、本研究の出発点となった 19 世紀中葉の南部アフリカにおける象牙捕獲の急増は、ザンジバル経由 (= 東アフリカ産) 象牙の需要が極限まで達したのちにさらに南部アフリカにまで捕獲の対象が拡大した局面を示していたことがわかる。また、そのような需要の拡大は、本研究の仮説のように近代ピアノ生産を動因とするものであったことが確認された。ただし、その関係は仮説で考えた直接的な因果関係ではなく、象牙加工業全般が「近代化」してくる過程と、象牙鍵盤製造からピアノアクション製造へという部品生産部門の拡大、そしてその事業の統合と、ピアノ製造業そのものの統合とが並行的に進み、最終的に両者が一体化してくるといふ、直線的ではない関係だった。それらの複合体は 19 世紀半ばから約一世紀にわたり、アフリカ産象牙の収奪に、19 世紀に見られたような「アフリカ商人」「アラブ商人」「奴隷商人」を介すことなく、直接に携わるようになった。一方、黒檀やマホガニー等の植民地産の材料も近代ピアノの材料として大規模に消費されたが、それらはピアノ産業の近代化に固有の役割をもった「もの」としての意味をもつことはなかったと考えられる。

## II. 近代ピアノの普及局面について

本研究では南アフリカ、とりわけケープタウンを事例に、欧米で製造された近代ピアノがどのような経路で普及し、使用されるようになったのかについて検討し、その結果、以下のことが明らかになった。(なお、近代ピアノの製造局面については主としてグランドピアノを念頭において検討を行ったが、以下ではタウンホール等の少数の場合を除いてアップライトピアノを念頭においている。)

(1) ケープタウン港の通関記録から、1860

年代に個人的な輸入としてヨーロッパ製グランドピアノが持ち込まれた例があることや、サイモンズタウン軍港(ケープタウン市)における兵士娯楽用ピアノの導入の導入が記録されていることを別とすれば、この地域へのピアノの導入を進める役割を果たしたのは学校およびタウンホールだった。ここでは市の入札記録から断片的な状況を把握し、全体の動向を類推した。それによれば、1920 年代ごろから一部の学校にピアノの導入が始まり、第二次世界大戦後、1950 年代には都市部では「白人」地域のみでなく一部の「カラード」地区の学校でもピアノの導入があったことが明らかになった(以上、いずれも南ア国立文書館ケープ分館所蔵市財務資料による)。コンサートグランドの導入も一部タウンホールで見られるが、アパルトヘイト体制下でその「聴衆」は白人に限定されていたと考えられる。

(2) ミッション系教会でのピアノ導入の例は発見されず、この点は、第一次世界大戦前の植民地でのドイツ系プロテスタントミッションの場合と対照的である。南アフリカでは 1920 年代ごろからはミッション教会ではなく「ゴスペルチャーチ」のような「アフリカ化」した教会がアフリカ人の中で主流となっていくため、そこに「近代ピアノ」の入る余地はほとんどなかったと考えられる。このことは、ケープタウンでの主要なピアノ販売者の一つであり今日も存続する Musik Heuer での聞き取りからも裏付けられた。

(3) 個別的な事例ではあるが、Abdullah Ibrahim (Dollar Brand) がジャズピアニストとして 1960 年代以降活動したことは、ポピュラーミュージックの分野から南アフリカでの近代ピアノの普及に一定程度貢献したと判断される。当人はアパルトヘイト体制下で必ずしも南アフリカに在住していなかったが、「ケープジャズ」のジャンルが

「カラード」住民の間で発展し（南アフリカ国立文書館ケープ分館所蔵写真資料）そこから黒人タウンシップへも影響を広げた。しかし、ピアノそのものは黒人タウンシップへはほぼ全く普及することはなかったと考えられる（今日のタウンシップでの現地調査）。「カラード」地域と「黒人」地域との大きな差は、アメリカと南アフリカとのジャズにおけるピアノの位置の差として注目される。

(4) 以上の調査の過程で 1950 年にケープタウン近郊のウェリントンで Dietmann 社というピアノ製造会社が設立され、1989 年まで製造を行っていたことが明らかになった。アフリカ大陸で唯一のピアノ製造会社である。同社はドイツ系南アフリカ人によって設立され、最盛期には年間 5000 台を製造し、南アフリカ各地で販売に加え、ヨーロッパ各地に輸出していた。この事実は、従来のピアノ史ではまったく知られておらず、（日本を例外として）20 世紀半ばまでは近代ピアノが欧米のみで生産されたとする大方の理解を覆すものである。この事実の発見が調査の最終段階であったため、解体後の同社の関係者の聞き取りや関連資料の調査を行うことができなかったが、本研究を進展させていく上で重要な問題を孕んでいる。アパルトヘイト最盛期の活動した会社ではあるが、相当の規模であったと考えられるこの会社で「白人」のみによってその生産が担われたとは考えにくく、そうであれば、この会社の労働者たちがどのような人々であり、製造過程にかかわる知識や完成した製品との関係がいかなるものであったかは、アフリカにおける近代ピアノの社会史的な意味を問う上で興味深い問題を投げかけるものであろう。今後の課題としたい。

（本研究について、KRONOS 誌への投稿論文を準備中）

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Yoko Nagahara, Colonial Memory and National History, Workshop on “Colonial Memories: Comparative Perspective on German, Japanese, and Korean Cases”

11 June 2015, Universität Tübingen

Yoko Nagahara, Land and “Tradition”,

Decolonizing the Agrarian Structure in Africa, 29 November 2016, University of Cape Town

Yoko Nagahara, ‘Tradition’ and Gender in Northern Namibia, Gender and Race Workshop, 1 December 2017, Universität Heidelberg

〔図書〕(計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

永原 陽子 (NAGAHARA, Yoko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90172551

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし